

二〇一六（平成二八）年三月二〇日（日曜日）

第九回 聖書と内村鑑三に学ぶ会 発表レジュメ

日本近代文学とキリスト教

——内村鑑三を媒なかつちとして——

独立系研究者* 倉井 香矛哉

一．はじめに

本発表では、芥川龍之介、太宰治、遠藤周作らに代表される近代日本の文学者たちとキリスト教のかかわりについて紹介していくことにしたい。とりわけ、発表者自身の文学およびキリスト教との接点となった芥川龍之介の場合に注目し、芥川と内村鑑三とのあいだを取り持つ対人的な関係性について紹介しながら、現代において文学を読むこと、聖書を読むことの意義の一端を明らかにしたい。

まず、本発表の方法的な前提として、日本の近代文学とキリスト教の関係についての一つの視座を示しておきたい。しばしば、キリスト教の影響関係において執筆された文学を包括する概念として、「キリスト教文学」というカテゴリーが想定されることがある。しかしながら、そこで取り上げられる芥川龍之介、太宰治といった作家たちは、実際には生涯を求道者として過ごし、けっきよくのところは明確なキリスト教信仰を持ち得なかった。また、本人はカトリックの洗礼を受けている遠藤周作の場合であっても、その小説のなかで語られるキリスト教の認識について仔細に検討すれば、そこには汎神論的な傾向を抱えていたことが指摘されており、やはり正統なキリスト教信仰に立つとすれば、論議を呼ぶ性質のものであるといえる。いずれにしても、文学とキリスト教のあいだで懊悩した作家たちにとって、彼らのテクストは「キリスト教文学」というジャンルそのものによって規定されるものではなく、その筆致は、いわば文学とキリスト教という二つの概念のあいだで引き裂かれるかのように書き進められたものであると推察される。したがって、本発表で取り上げる小説のテクストは、作家自身がキリスト教の信仰を持っていたかどうか、という狭義のキリスト教文学のカテゴリーに回収するのではなく、以下の引用文献に示されているような広義の概念規定によって選択することにした。

《資料①》柴崎聰「キリスト教文学とは何か——芥川龍之介、太宰治、中原中也をめぐって」（『福音と世界』新教出版社 二〇〇九・一二）

「その文学的営為の根拠に、キリスト教や聖書を置き、そこからのメッセージに促され励まされ、真の自由を得て、発信する文学」

↓本発表では、ここに引用した柴崎の定義にしたがい、「キリスト教文学」と呼ばれるカテゴリーを作家個人の信仰に回収するのではなく、キリスト教や聖書とのかかわりのなかで書かれた文学というゆるやかなくくりで捉えることとする。

二．近代日本文学とキリスト教

日本文学にとどまらず、日本文化における一神教的な神という概念の受容については、明治期以来、大きなテーマのひとつであったといえる。内村鑑三や新渡戸稲造に代表されるキリスト者の業績もあって、当時の知識人、また、学生たちは、こぞって聖書を読んでいたとされる。内村の刊行した『聖書之研究』は、当時としては破格の部数を誇る雑誌であったとされている。

しかしながら、イエスという人物をどのように受け止めたのか、という点については、ささやかな抵抗ないし違和感をもって受け止められていたことが伺える。一例として、夏目漱石の「文学論」や森鷗外の「かのやうに」には、抽象的な神に対する信仰について言及した一節がある。

《資料②》夏目漱石「文学論」（大倉書店、一九〇七／明治四〇年五月）

「現在の西洋人が所謂神と称するものは一種の最高概念にして、これを名けて無限と云ひ、或は絶対と云ふ。（中略）今の所謂神と称するところのものは一面に於て知的渴望より出立して凡百の現象の原因をこゝに集合せしめたものの如し。（中略）神は人間の原形なりと云ふ聖書の言は却て人間は神の原形なりと改むべきなり。」

《資料③》森鷗外「かのやうに」、『中央公論』（岩波書店、一九二二／明治四五年一月）

「まあ、こうだ。君がさつきから怪物々と云っている、その、かのやうにだがね。あれは決して怪物ではない。かのやうにがなくては、学問もなければ、芸術もない、宗教もない。人生のあらゆる価値のあるものは、かのやうを中心に行っている。昔の人が人格のある単数の神や、複数の神の存在を信じて、その前に頭を屈めたように、僕はかのやうの前に敬虔に頭を屈める」

ここで示されているのは、宗教現象の心理的考察であり、一神教や多神教のいずれでもなく、諸学問、芸術、宗教のすべてを支えている「かのやうに」という抽象的な機構にこそ帰依したい、という合理主義的な態度である。これらはいずれも、抽象神としての神を対象とする分析的な語り、ないし記述であって、実体のある父なる神、あるいは人格的なイエス・キリストを主体的に信じることを扱ったものではない。

↓明治期の知識人にとって、具体的な人性として受肉し、また、歴史的人物として生きたイエスただひとり神の子として受け入れることは、知的教養として聖書を読むという関心を超えてしまうことであった。また、それまでの日本的な信仰との訣別という側面を伴っていた。それは、ある種の困難を伴う認識論レベルでの格闘だったのではないだろうか。

しかし、大正時代に入ると、しだいにキリスト教への理解には変化がみられる。まず、芥川龍之介の「神の微笑」には、イエス本人は登場しないものの、キリスト教における父なる神に相当する存在について、「泥烏須」という呼称で語られている。ただし、そこで語られているのは、日本の神々に対する「泥烏須」の敗北である。

《資料④》芥川龍之介「神神の微笑」、『新小説』（一九二二／大正十一年一月）

「事によると泥烏須自身も、この国の土人に変るでしょう。支那や印度も変ったのです。西洋も変らなければなりません。我々は木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇の花（中略）どこにも、またいつでもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。……」

《資料⑤》関口安義『芥川龍之介』（岩波新書、一九九五年一〇月）

「芥川龍之介と『聖書』とのかわりは、かなり早く一高在学中にはじまる。」「当時の旧制高校の学生が、『聖書』やキリスト教を教養として受け入れたのは、一つの時代的現象であった。」

《資料⑥》芥川龍之介「侏儒の言葉」、『文藝春秋』（一九二三／大正十二年一月〜一九二五／大正十四年一月）

「人生は地獄よりも地獄的である。」「あらゆる神の属性中、最も神のために同情するのは神には自殺できないことである」

《資料⑦》芥川龍之介「断片」（一九二六／大正十五年頃、推定）

「僕は年少の時、硝子画の窓や振り高炉やコンタスの為に基督教を愛した。その後僕の心を捉へたものは聖人や福者の伝記だった。僕は彼等の捨命の事績に心理的或は戯曲的興味を感じ、その為に又基督教を愛した。即ち僕は基督教を愛しながら、基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だった。（中略）僕は基督教を軽んずる為に反つて基督教を愛したのだった。（後略）」

↓このように、芥川龍之介にとっての「基督教」への興味は、聖人や福者の「伝記」として、あるいは「心理的或は戯曲的興味」を喚起されていたものにほかならず、「基督教的信仰」そのものについては関心をも

っていないかったことを読み取ることができる。また、どちらかといえば、カトリックの宗教建築に魅了されていたことも読み取ることができる。晩年に至るまで聖書への興味を失わなかった芥川ではあるが、「侏儒の言葉」の一節にもあるように、「基督教的信仰」において神を受け入れることはなかった（なお、これらの点については、つづく第三章において詳述することにした）。

以上のように、日本文学の系譜においては、キリスト教はかならずしも信仰的な探究心によって求められていたのではなく、教養として受容されているにすぎなかった。北村透谷や有島武郎のように、一度は洗礼を受けながらも、やがて棄教する場合もみられた（なお、彼らはいずれも自殺している）。

やがて、遠藤周作に至っては、宣教師の殉教と棄教というテーマでイエスが直接的に描写されるようになる。その一例として、遠藤の「沈黙」では、司祭の棄教の危機にあつて、「基督がユダに売られたように、自分もキチジローに売られ、基督と同じように自分も今、地上の権力者から裁かれようとしている」という「あの人と自分とが相似た運命を分かち合っているという感覚」について語られている（神の子としてのイエスと司祭とを「相似た運命」においてあたかも同列であるかのように語ることの神学的な是非は措くとしても、この筆致、文学的な想像力には、たしかな緊迫感がある）。

また、そのような体験は、「うづくような悦び」で「司祭の胸をしめつける」と語られている。さらに、「神は本当にいるのか。もし神がいなければ、幾つも幾つもの海を横切り、この小さな島に一粒の種を持ち運んできた自分の半生は滑稽だった」とさえ語られている。加えて、司祭は、かつての師であつたフェレイラの口から「この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない」と告げられる。すなわち、すべての宣教が日本では失敗に終わっていたことが示唆されるに至るのである。

《資料⑧》遠藤周作「沈黙」

「デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして別のものを作りあげはじめたのだ。言葉の混乱がなくなったあと、この屈折と変化とはひそかに続けられ、お前がさつき口に出した布教がもつとも華やかな時でさえも日本人たちは基督教の神ではなく、彼等が屈折させたものを信じていたのだ。」

ここでは、日本語圏におけるキリスト教の受容史において、「デウス」を「大日」に置き換え、神の子イエス・キリストの存在が誤解されたままになってきたことが示唆されている。つまり、キリスト教において父なる神として把握されている存在について、日本人はそれをあくまで抽象的に捉え、「大日」という呼称によって日本的な信仰との接合において理解しようとしたが、それはけっきょくのところ、キリスト教の教

理のなかで語られている神とは異なる文脈のなかで「屈折」して捉えられたものだったのである。また、肉体をともなう地上に生まれた神の子イエスについては、けつきよくのところを理解することができなかったといえる。イエス・キリストを唯一の神の子、救い主として認めることがキリスト教の中心的課題であった。にもかかわらず、日本的信仰のなかでは、それはあたかも八百万の神々と同列に扱われる神のひとりであるかのような捉えられ方をしてしまったのである。

↓このように、イエス・キリストを唯一の救い主としては受け入れていなかった、という姿勢は、日本の切支丹たちはキリスト教を、ただし、受容していたのか、という問題提起につながる（しかし、ただし、信じる、とはどういうことだろうか。そこには、あらゆる文化が輸入される場合に起こりうる、土着化の問題が介在している）。

また、長谷川（間瀬）恵美は、遠藤周作の文学活動における「宗教的テーマ」について、「いかにしてキリスト教が日本文化内において開花することができるか」という「キリストの実生化 (Inculturation) の問題」であったと要約している。長谷川（間瀬）は、遠藤の小説や評論にみられる「汎神性 (Pantheism)」という用語を考察することから、のちの「母なるもの」という思想に「積極的な評価」を下す立場を採っている。

↓しかし、この「汎神性 (Pantheism)」という用語は、キリスト教会としては肯定しがたい論旨であるように思われるかもしれない。いずれにしても、遠藤周作のキリスト教文学は、宗教的テキストと読むか、文学的テキストと読むかによって、論議を醸す性質のものであるといえるだろう。

以上のように、日本文学におけるキリスト教の受容のなかにも、さまざまな文脈と多義性が含まれていることが明らかになった。こうした小説のテキストに胚胎している多義的な側面を読み取っていくことは、そこで語られている神なるものに対する理解を深めることになると考えられる。それらを逐一明らかにすることは作品研究の領分になってしまうため、ここでは控えることとするが、いずれにしても、芥川龍之介の「南京の基督」や遠藤周作の「沈黙」にみられるイエスの表象は、弱い者、立場の低い者、ひいては、いま現在絶望の最中にある者の側に立つ人間としてのそれである、と言えるだろう。とくに、「沈黙」のなかで描かれている信仰的挫折の「痛み」からは、文学的な読みを越えて、ある一人の信仰者の価値規範の根幹が揺るがせられるような体験が語られている。その絶望に寄り添うのが、「踏むがいい」という許しの言葉であって、そこには、寛容という言葉を超えた厳粛なまなざしを見出すことさえできる。作家個人が信仰をもつこと、ただし、信じることについての論議はありうるものの、キリスト教の根幹の精神については、すぐれた文学者たちは、たしかに掴み取っていたように思われる。

三．内村鑑三を媒なみだちとして——芥川龍之介とキリスト教——

ここからは、前章で取り上げた作家のうち、とくに芥川龍之介の場合に着目しながら、芥川と内村鑑三のあいだを取り持った室賀文武について紹介するとともに、文学とキリスト教のあいだで懊悩した作家の実像の一端を明らかにしていきたい。

《資料⑨》宮坂寛「芥川龍之介と室賀文武——「芥川龍之介とキリスト教」論への一視点」、『上智大学国文学論集』第五号（上智大学、一九七二・一二）

「芥川のキリスト教観のなかには、室賀的キリスト教が色濃かったと思われる。それを通して無教會的、即ち内村的信仰が多少なりとも流れ込んだことは間違いない。芥川作品——例えば「河童」「西方の人」など——にもその翳りが発見できる。ただ芥川が眼に見える室賀の強烈な個性にのみ拘泥したがゆえに、それを支えている信仰との真の出会いが薄かったのは想像に難くないと思われる。」

室賀文武は、芥川の遺構「歯車」に登場する「或聖書会社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈禱や読書に精進してゐた」「老人」のモデルでもあるとされる。芥川のキリスト教観の変遷のなかで、室賀との交流の影響はけっして小さいものではないと思われる。

《資料⑩》小沢保博「芥川龍之介と大衆 「西方の人」再考」、『上智大学国文学論集』第一号（上智大学、一九七八年一月）

「(前略) 芥川のキリスト教観は三つの段階を経て最晩年の作品「西方の人」に達したことが伺える。すなわち具体的には、

- (Ⅰ) 純粋な異国への憧れ、南蛮趣味、審美的視点からキリスト教を扱った時機、「煙草と悪魔」「邪宗門」「黒衣聖母」「長崎小品」「おしの」「糸女覚え書」「さまよへる猶太人」「るしへる」「きりしとほる上人伝」「神々の微笑」「誘惑」等が作品として挙げられる。
- (Ⅱ) 殉教者たちをへ利那の感動」という人生における幸福な瞬間を持ち得た人々として扱った時期、「尾形了齋覚え書」「じゅりあの吉助」「南京の基督」「報恩記」「おぎん」「奉教人の死」等が考えられる。
- (Ⅲ) キリスト教そのものが芥川自身の主体的な問題となってきた時期、「西方の人」「統西方の人」

《資料⑩》関口安義『芥川龍之介』（岩波新書、一九九五年一〇月）

「死を目前にして芥川は、再び『聖書』に接近する。死の前年の一九二六（大正一五）年三月五日、芥川は室賀文武という内村鑑三門下の無教会派のクリスチャンから『聖書』をもらった札状を出している。室賀は芥川の実家、耕牧舎にかつて勤めており、芥川を小さいころから知っていた老人である。芥川晩年のキリスト教への接近は、この人の存在に負うところが大きい。」

↓芥川龍之介の聖書とのかかわりは、一高在学中はもっぱら教養としての知的関心からカトリックに接近したにすぎないが、晩年には内村鑑三門下の室賀文武とのかかわりが重要な位置を占めていた。

四・まとめに代えて

以上、近代日本の文学者たちとキリスト教のかかわりについて、まずは明治期から昭和に至るまでの流れを概観し、つづいて、芥川龍之介の場合に着目しながら、その求道者としての道行きのなかで内村鑑三とのあいだを取り持った室賀文武について概観してきた。文学とキリスト教のあいだで懊悩する作家の人生は、作家個人の内面や創作意図だけに還元されるものではなく、さまざまな人格的関係性をふくめた協働の関係であり、そこに聖書の言葉がはたらきかけていた、ともいえる。

また、本発表を終えるにあたって、これらの文学者たちの筆致とその人生の道行きが、発表者自身の実存的な問題意識といかなるかかわりを持っているのか、その一端に触れることにしたい（具体的には口頭で補足）。

*発表者プロフィール・倉井香矛哉（くらい・かむや） イクトゥス・プロジェクト共同代表 独立系研究者（文学研究者、音楽家）

学問芸術の運動体「イクトゥス・プロジェクト」の共同代表。西南学院大学国際文化学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。日本学術振興会特別研究員DC1採用後、現在は独立系研究者として活動している。文学研究と並行するかたちで、学会および研究誌にとどまらず市民向けイベント・講演会における学際研究、セクシュアリティ／ジェンダー批評についての研究発表を行っている。また、W. S. クラークや内村鑑三、新渡戸稲造の思想を継承する無教会キリスト教の後継者でもある（二〇一五年度以降、無教会全国集会準備委員、『内村鑑三研究』編集委員会事務局）。さらに、音楽家としてのアイドルユニットへの楽曲提供やチャリティイベントへの参加を通じて、日本各地で活躍するアーティストたちによる文学場・芸術場の創出を目指している。